報告

アフレコ活動を取り入れた発音授業の実践と課題

Practical Pronunciation Instruction and Issues Incorporating Anime Voice Acting Activities

川染 有　KAWASOME Yu

デジタルハリウッド大学 非常勤講師
Digital Hollywood University, Lecturer

新たに設置された科目「総合日本語」において、アニメのアフレコ活動を取り入れた発音授業の実践を行った。デジタルハリウッド大学ではこれまで、留学生に対する日本語教育において、学習者が日本語の発音を組織的かつ体系的に学べる機会は設けられていなかった。そこで、教師から学習者への一方向的な従来型の発音指導ではなく、アフレコ活動をとおして、楽しくかつ実践的に発音を習得するための授業を実施した。その結果、ほとんどの学習者が意欲的に発音練習に取り組み、発音にも向上が見られた。また、発音練習の過程では学習者間の協働が観察された。一方で、「声の演技」に消極的な学生への対応が課題として残った。

1. はじめに

筆者は日本で就職活動を行う留学生を対象とした日本語の授業を担当している。就職試験を想定した模擬面接では、日本語能力が高く発話が流暢であるにもかかわらず、発音に課題があるために自己PRや志望動機などの内容が聞き取りづらく、学生の熱意や強みが伝わりにくいという場面にしばしば直面してきた。「日本で日本語を学んでいれば発音も自然に上達するはず」というのはごく一般的な誤解である。そのため、面接試験のように短時間のコミュニケーションにおいて、採用担当者が留学生の発音の「良し悪し」を日本語能力と関連づけて判断してしまう可能性は無視できない。

日本語教育における音声教育に対する捉え方は、「発音矯正」から「音声指導」へ、さらに「音声学習支援」へと変化してきた[1]。音声教育の中でも特に発音教育という観点から見ると、教師の役割は、学習者の「誤りのある」発音を「矯正」する時代から、コミュニケーション場面において「不自然な」「適切でない」発音を「指導」する時代、そして、学習者が主体的に発音を学べるよう「支援」する時代へと変遷してきたと言える。

では、デジタルハリウッド大学の日本語教育において、音声教育はどのように位置づけられているのであろうか。これまで、音声のインプットである「聴取」に関しては「聴解」の授業の中で実践されてきた。一方、アウトプットである「発音」に関する組織的かつ体系的な指導は行われておらず、それぞれの教師が各々の教育観のもとに発音を「指導」したり発音学習を「支援」したりしてきたと言える。そこで、楽しくかつ実践的に日本語の発音を身につけることができる、発音に特化した授業を提案し、「総合日本語B」として実践する機会を得た。本稿では、その実践内容および結果について報告したい。

2. 授業の概要

2.1 対象者

対象者はいずれも3年生であり、母語は中国語、広東語、韓国語、英語である。クラスは日本語レベル別に2つに分けられた（レベルA-B、およびレベルC-E）。履修登録者数は各クラスとも6名であったが、継続的に授業に参加したのはA-Bクラス5名、C-Eクラス4名であった。

2.2 最終課題

本授業の最終課題は、アニメのアフレコ（10分程度）を行い一つの作品として完成させることである。オリエンテーション時に、全員が必ず1人以上の登場人物を担当すること、セリフを音声面で完全に模倣する（「完コピ」する）ことが目標であることを説明した。この段階で、「声の演技」であるアフレコに抵抗がある場合、履修を取り消しても問題ない旨を伝えたが、履修を取り消した学生はいなかった。

2.3 授業の内容

本授業は選択科目である。2024年度の1クォーターにレベルA-Bクラス、2クォーターにレベルC-Eクラスが実施された。シラバスは2クラス共通である。授業内容は表1のとおりである。

表1：総合日本語Bシラバス

回	授業内容
1	オリエンテーション、日本語の発音の概要
2	日本語の発音（拍）、最終課題について
3	日本語の発音（アクセント）、アフレコ準備
4	日本語の発音（イントネーション）、アフレコ準備
5	アフレコ練習
6	アフレコ練習（2Qはゲスト回）
7	アフレコ練習（1Qはゲスト回）
8	最終課題発表（アフレコ）

前半（1～4回）は、日本語音声の特徴について理解するための授業を行った。教材を用いて学習者の音声を聞き、母語の影響を受けた発音が聞き手にどのような印象を与えるかなどについて説明した。例えば、4回目の授業では、イントネーションが不適切であったために相手に誤解されてしまった学習者のエピソードを取り上げ、イントネーションの違いが特定の気持ちや意図を伝える機能を持つことなどを確認した。毎回の授業後に、各自の発音を録音し提出することを課題とした。提出された音声については次の授業で個別にフィードバックした。また、この期間に最終課題としてアフレコするアニメ作品、シーン、配役を決めるための話し合いを行った。

後半（5～7回）は、アニメを見ながらセリフの練習を行った。筆者が発音を確認しながら、セリフごとにフィードバックを行った。また、学生との交流およびモチベーションの維持を目的に、プロの声優をゲストとして招いた。声優という職業に対する学生の関心は高く、両クラスともにゲストに対して活発に質問をする様子が見られた。アフレコに消極的な学生も、ゲスト回には前向きな態度で

©2024 Digital Hollywood University

授業に臨んだ。以下に授業の感想、ゲストへのコメントを抜粋する。なお、コメント中の「Mさん」はゲストのことである。
（コメントはすべて原文ママ）

・今日の日本語の授業は、単なる言語学習を超える特別な経験でした。
・私の夢は声優ではありませんが、Mさんのように一つのことに没頭して、どんな状況でも動揺することなく完璧に遂行できるプロになりたいと思いました。
・プロの声優と共にするアフレコの経験は私の人生で最初でおそらく最後のような大切な機会だと思います。
・役を演じる時に音を変える事ではなく心からその役になりきるっていう点を教えてもらったことが本当に役に立ちました。
・今日の授業で色々なこと聞きました。Mさんのアフレコ凄かった、担当のキャラのセリフのシーンも、見なくてもその口調や性格を上手く演じる、流石プロ！な感じです。
・声優さんと実際会うことができて嬉しかったです。何年前ごろ、アニメが大好きだったですけど、自分が好きなキャラクターの声優さんを調べたり動画をみたりしました！その時の疑問だったところの聞けたので充実した時間だとおもいます。貴重なお時間ありがとうございます
・今週のクラスはとても楽しく、本当に人生一度しか経験できないものでした。声優が好きな人として、業界のプロセスや舞台裏を知ることはとても興味深かったです。
・Mさんの声の演技を聞き、それをリアルタイムで体験できたことは驚きでしたし、私たちの課題をどのように進めていくかのヒントを得るのにとても役立ちました。
・Mさんのご指導にはとても感謝していますし、プロの声優さんと一緒に大好きな日本のアニメの吹き替えを体験できたことは、本当に忘れられない素晴らしい思い出です。

以上のコメントから、ゲスト回が学生にとって特別な体験となり、アフレコのモチベーション維持に貢献したことが見て取れる。

８回目の最終授業には、アニメを見ながら最終課題としてのアフレコを行った。アフレコのセリフは評価対象として録音した。

3. 結果と考察

3.1 アフレコ活動を活用した発音学習の利点

本授業では、アフレコ活動をとおして楽しくかつ実践的に日本語の発音を身につけることを目指した。従来の「発音の授業」は、母音や子音の特徴、舌の位置などを学び、教師や教材のモデル音声を聞きながら単語や例文を発音してみるなどの方法で行われるものが多かった。このような授業スタイルと比較して、アフレコ活動を取り入れた本実践にはどのような利点があったのか、今回の実践を通じて得られた気づきを３点にまとめた。

（1）フィードバックの捉え直し

発音学習においては、学習者の発音に対して教師などが適切にフィードバックを行うことが重要であるが、他者の前で自分の発音が指摘されることをネガティブに捉える学習者は少なくない。一方、今回のアフレコ練習という文脈では、発音の「正しさ」ではなく登場人物のセリフを「完コピ」できているかに意識が向けられた。そのため、学生は教師によるフィードバックを「指導」や「誤りの指摘」と捉えるのではなく、完コピするためのヒントやアドバイスとして前向きに受け入れる様子が見られた。従来型の授業ではネガティブに意味づけされていたフィードバックが、ポジティブなものとして捉え直されたと言える。

（2）学習者間の協働

教室内では学生同士が協力し合って発音練習をする様子が観察された。学習者の母語によって、習得しやすい日本語の発音とそうでない発音があるが、例えば、日本語の高低アクセントを意識するのが難しい学生に、声調言語話者である別の学生が日本語のアクセントの発音の仕方を教える場面などが見られた。

発音指導はしばしば教師から学習者への一方向的な指導となりがちであるが、グループ活動を取り入れることにより、学習者間で協働が促された形となった。

（3）正確さの向上

アフレコ活動を行うことで発音の正確さや流暢さが向上することが報告されている[2]が、本授業においても最終課題までに、それぞれが担当したセリフにおいて、リズム、アクセント、イントネーションの面でほとんどの学生に発音の向上が見られた。一方で、対象者となった学生の発話の流暢性が高かったこともあり、流暢さに関して大きな変化は感じられなかった。

3.2 発音学習の機会の提供

これまで組織的かつ体系的な発音指導が行われていなかったデジタルハリウッド大学において、一定の日本語音声の知識を体系的に習得しつつ、アフレコ作品を完成させる過程を通じて日本語の発音を学ぶという授業を実施することができた。これにより、学生が楽しみながら実践的に日本語の発音を学ぶ機会を提供できたと考える。

4. 課題

アニメ作品のアフレコは、単語を一つひとつ発音したり、例文を読み上げるような発音練習とは異なり、「声の演技」が必要である。今回、アニメや声優に関心のある学生は積極的にアフレコの練習に取り組んだ様子が見られた一方で、関心が薄い学生は、声の演技をすることに対してかなり消極的であった。こうした学生にも負担感なく、日本語音声の知識を身につけ、発音練習を実践してもらえるような工夫が必要である。

今年度は１クラス４～５名と少人数であったことから、筆者が一人ひとりに対して音声面に関するフィードバックを行うことができた。この点は少人数ならではの利点と言える。今後は、学生同士で音声をフィードバックし合ったり、録音した音声を分析したりする中で、自ら課題点を指摘し修正できる力を育成するための授業を実践していきたい。

5. まとめ

本稿では、アフレコ活動を利用した発音授業の実践について報告した。最終課題までには、それぞれのセリフにおいて、ほとんどの学生に、発音の向上が見られた。また、ゲストとの交流やグループワークを取り入れたことで、発音学習につきものの「つまらない」というネガティブなイメージを払拭し、楽しみながら実践的に日本語の発音を習得するという目標を一定程度達成できたと考える。

発音学習の目的は、伝えたい意図や見せたい自分のイメージを、音声をとおして自在に表現することであると筆者は考えている。今後もこのような目標を持つ学習者のために、本授業をブラッシュアップしていきたい。

参考文献

[1] 伊藤茉莉奈：『日本語教育における音声に対するアプローチの展望―発音矯正・音声指導・音声学習支援から音声をテーマとする対話の実践へ―』早稲田日本語教育学 第30号（2021年），132頁.
[2] 鈴木美穂：『日本語演習授業におけるアフレコの実践』日本語教育方法研究会誌 Vol.29 No.2（2023年）,95頁